



『頼貞随想』(1956)より

父頼倫は三人兄弟の中で一番研究心があつたようだ。そしてその研究が文化の進歩や国運の将来に関することになると一層熱心であつた。(略)明治廿九年に鎌田(栄吉)氏が指導役で父が欧州各国を視察し帰朝後邸内の一角に私立図書館「南葵文庫」を創立して旧紀州藩の図書記録を収蔵し、その頃まだ発達しなかつた図書館事業をつうじて文化事業をはじめたのであつた。これが後年私の南葵音楽事業ならびに南葵楽堂にまで発展することになったのである。父のこのような性格は他面からみれば執着性の強いという欠点になってあらわれてくる。そのために、人の迷惑を顧みず、時には暁にいたるまで理事会や協議会をして人々を驚かせたものである。これがまた父を比較的早く死に至らしめた原因ともなつた。後年西園寺老公が徳川三兄弟を評して長兄の家達は勇気がありしかも果敢である。次兄の達孝は平凡そのもの。末弟の頼倫は深思熟慮細心の注意を持っているが惜しいかな勇気に不足で、もし果敢であつたなら彼こそ一番の人物であつたらうといつたと聞いた。」「(あの頃この頃—幼少の頃」pp.31-32)

『蒼庭楽話』(1941)より

私の父は、恰度この頃歐米遊歴の旅から歸つて來た。そして當時一般の洋行者のやうに父もまた西洋かぶれの一人となつて歸朝した。それで、家の中は萬事西洋式でなければならなかつたし、娯樂も日本のものは喜ばれなかつた。殊に音樂は、日本のものは遊藝に過ぎないと云つて、一顧も與へられなかつたばかりでなく、全く禁ぜられた。そして父は周圍の者に命じて、私のために軍歌や軍樂のやうなものを聽かせるやうにした。また晚餐の後などに父はよく外國から持つて歸つた蠟管の蓄音器レコードを取りだして、私に西洋の音樂を聽かせてくれた。」「(幼年時代の思ひ出」p.6)

九歳の時であつた。ある初夏の午後、華族會館から歸つて來た父が私を呼んで「近いうちに音樂會があるから伴れて行つて上げよう」と云つた。私は音樂會とはどんなものかまつたく知らなかつたが、何か珍しいものに違ひないと思つた。そしてよく話に聞く夜會といふやうなものを聯想して、綺麗な幻を描いたりした。

いよいよ音樂會の日が來ると私は行水をさせられた。音樂會は夜なのであつた。私は夕暮、両親に伴はれ、馬車に乗つて、音樂會のある華族會館に出掛けた。(略)

私の馬車が門を潜つて玄關に着いたときにはもう電氣が灯つてゐた。建物の中は大變立派であつた。恰度お伽話に出て來る女王様の宮殿のやうに思はれた。私はぴかぴかしてゐる階段を昇つて真中の大きな部屋に這入つた。其處は煌々とシャンデリアが輝いて、人が多勢ゐた。椅子が澤山並んでゐて、その向うには燕尾服を着た樂人が三四十人行儀よく椅子に腰掛けてゐた。暫くすると同じ燕尾服を着た西洋人が這入つて來て、並んでゐる樂人の前に立つて棒を振つた、どんな音樂が奏されたか少しも覺えてゐない。ただ何もかも綺麗であつたといふ印象だけが残つてゐる。」「(初めて聽く管絃樂」 pp.12-13)